

第6学年1組 道徳学習指導案

平成23年11月18日（金）第5校時

指導者 東松山市立高坂小学校

教諭 安元 信幸

児童数 33名

1 主題名 みんなが気持ちよく 4－（1）

資料名 「イニシャルの落書き」 出典 彩の国の道徳「夢に向かって」 埼玉県教育委員会

2 主題設定の理由

（1） ねらいとする道徳的価値について

児童が成長することは、同時に社会や集団の様々な規範を身に付けていくことでもある。高学年の内容項目4－（1）には「公德心をもって法やきまりを守り、自他の権利を大切にしながら進んで義務を果たす。」とある。これは、児童が生活する上で必要とされる社会規範を守るとともに、公德心を持ち、それらの精神を日々の生活の中に生かしていく児童を育てようとするものである。規範意識が低下している今、重要な内容である。同じく4－（1）として低学年では「約束やきまりを守り、みんなが使う物を大切にする。」、中学年では「約束や社会のきまりを守り、公德心をもつ。」とその内容が示されている。

公德とは、公衆のひとりとして公衆のことを考えて行動するところの、いわゆる公衆道徳であり、さしあたりは、人に迷惑をかけないという性格が強い。したがって、公德心は、公衆生活において互いに迷惑をかけまいとする心構えであり、公共の秩序を維持し、みんなが気持ちよく生活するために欠かせないものである。

この段階においては、法やきまりの意義を理解し、遵法の精神をもつところまで高めるとともに、自由や権利ばかりを主張しては社会が維持できないことについても考えを深め、義務をしっかりと果たす態度を育成することも重要とされる。遵法は社会秩序を維持するものである。また自由や権利には、公共の福祉に反しないという制約が伴う。そして、公衆のひとりとして公衆のことを考えて行動する対外的・対他的な義務がある。このように考えると、遵法の精神や権利義務を尊重する態度を支えるものこそ公德心である。

（2） 児童の実態について

この時期の児童は、知的な能力においては、抽象的、論理的に思考する力が増し、行為の結果とともに行為の動機をも十分に考慮できるようになる。集団や社会とのかかわりでは、属している集団や社会における自分の役割や責任などについての自覚が深まっていく時期である。

本学級の児童は、集団生活を送る上でのきまりの必要性を理解し、多くはこれを守ろうとしてきている。また、学級のための当番活動や係活動に対する役割や責任を自覚して進んで行っている児童も多い。しかしその内面を探ってみると、「みんなもしているから。」「ほめられるから（怒られる・注意されるから）。」という公德に基づかない判断も見られる。「みんなにとって」「社会にとって」といった視点からの、自分自身の行為についての自覚が不十分な面がある。

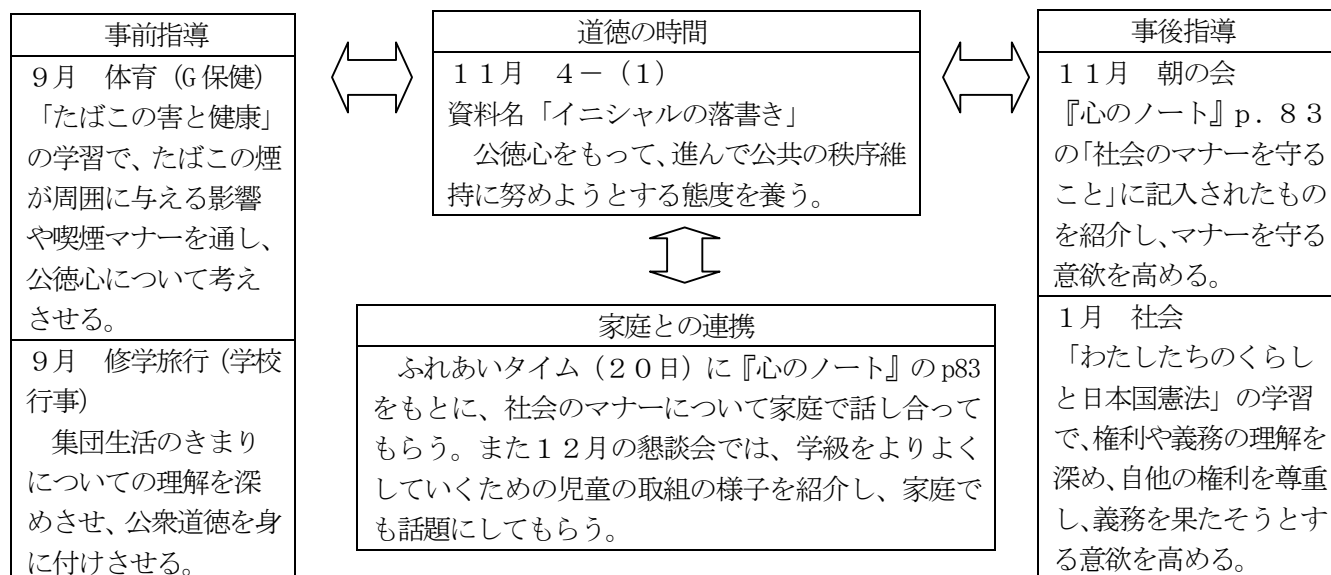
（3） 資料について

主人公のぼく（慎吾）は、学校帰りに本屋のシャッターに描かれたマークを見て、興味を惹かれた。家に着くと、すぐに自分のマーク作りをノートに始めた。翌日、登校したぼくは、友達机の裏に卒業生がマジックで描いたサインと、それを真似してマジックでサインをしている友達の姿を見る。その夜、自分のマークが完成し、どこかに描き残したいとの思いを抱いた。しかし、翌朝、本屋の人たちがシャッターの落書きを消している様子を見て、自分のマークを描き残すことを思いとどまるという話である。

本資料の活用にあたっては、マジックで描かれた卒業生のサインや、友達がマジックでサインをしている様子を見た主人公が、自分のマークをやっと完成させたときの思いを中心場面として、多様な考えについて話し合わせ、公德に関わる価値の自覚を深めたい。多くの児童は「落書きは、いけないこと。」との認識を有しているので、表面的に「あるべき論」を発言しやすい。そこで、マーク作りに励んでいるときの気持ちに十分共感させ、「できあがったマークを描き残したい！」という主人公の思いを強くもたせる。その上で、「や

っと完成させた時に、どのようなことを考えているか。」について問い、「描いて残したい」「残したいが、してはいけないことではないか。」「描かない。」等の行為をと、その動機についての多様な考えを引き出していきたい。多様な価値観を類型化したのち、お店の人がシャッターの落書きを消している場面を見た主人公を通して、価値への覚醒を押さえていきたい。

- 3 ねらい 公徳心をもって、進んで公共の秩序維持に努めようとする態度を育てる。[内容項目4－(1)]
4 他の教育活動との関連



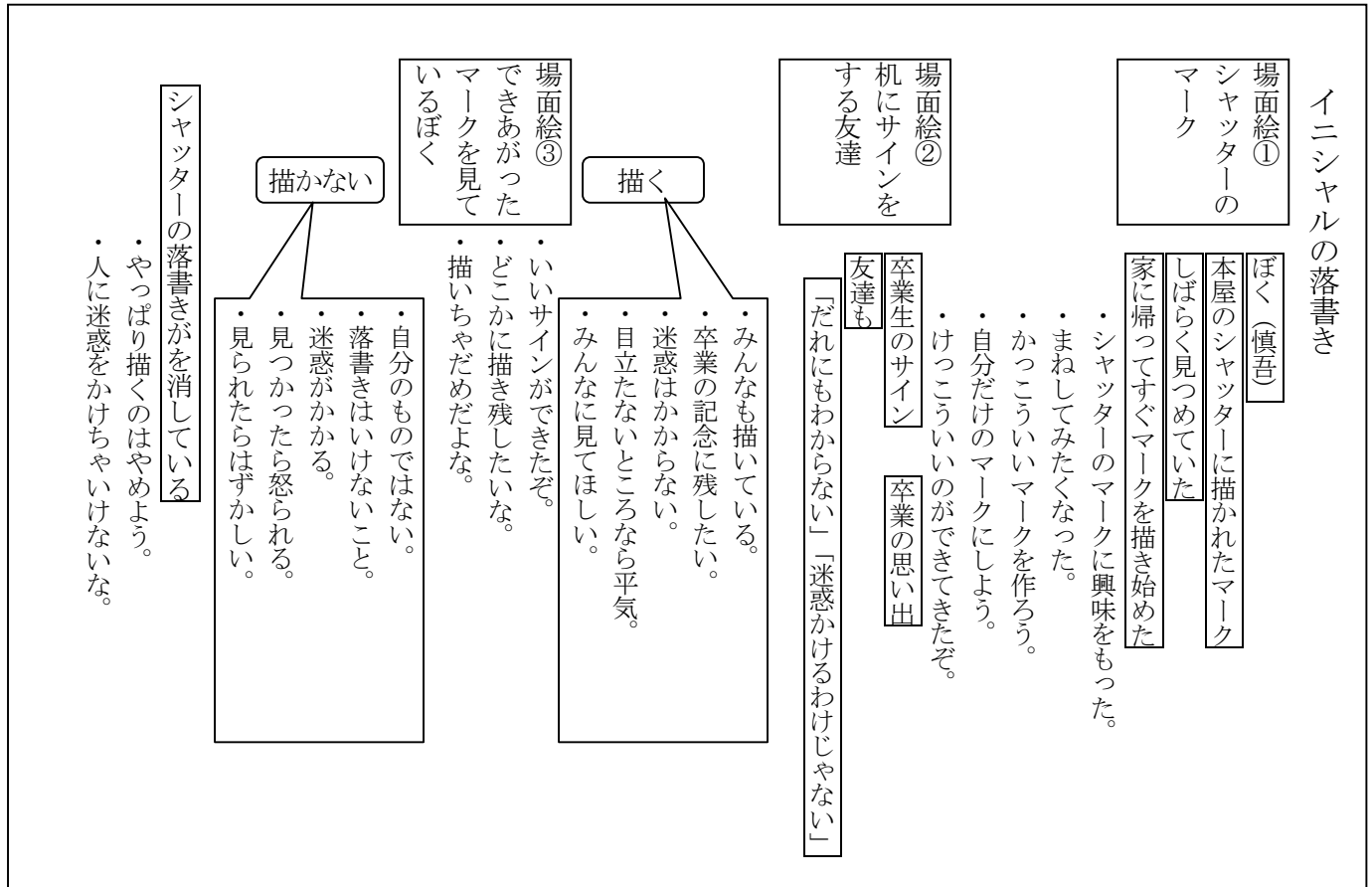
5 学習指導過程

段階	学習活動・主な発問	予想される児童の発言	指導上の留意点 ☆評価の観点
導入	1 ストリートアートの画像を見る。	・うわあ、うまいな。 ・これ何で描いているのかな。 ・誰が描いたのかな。	・視覚的な効果を上げるため、電子黒板に画像を映し出す。 ・ストリートアートに興味をもたせ、資料へとつなげる。
展開	2 資料「イニシャルの落書き」の範読を聞き、話し合う。 (1) 家に帰ってすぐに自分のマーク作りを始めたのは、どんな気持ちからですか。	・シャッターのマークに興味をもった。 ・まねしてみたくなった。 ・かっこいいマークを作ろう。 ・自分だけのマークにしよう。 ・けっこいいのができてきたぞ。	・主人公になって考えながら聞くよう指示する。 ・センテンスカードを貼りながら、登場人物、条件・状況を押さえる。 ・シャッターの落書きに興味を惹かれた主人公の気持ちに十分共感させ、児童の言葉を用いてまとめ板書する。 ☆落書きに興味を惹かれ自分も真似して作ろうとする主人公の気持ちに共感しているか。(発言・表情)

6 評価の観点

- ・公德心の大切さに気付き、進んで公共の秩序維持に努めていこうとする意欲を、高めることができたか。(発言内容・表情・道徳学習ノート)
- ・多様な考え方に基づいた話合いを引き起こし、公德心の大切さに気付けるような発問及び発問構成ができていたか。(発言内容・観察)

7 板書計画



【資料分析表】

ねらい 公德心をもって、進んで公共の秩序維持に努めようとする態度を育てる。4－（1）

① 資料 資料名：イニシャルの落書き （出典 彩の国の道徳「夢にむかって」高学年）

②最も話し合わせたい場面

- ・完成したイニシャルのサインを見ている場面。

③話合いのきっかけを効果的に投げかけるための発問（多様な価値観が引き出される発問）

- ・完成したイニシャルのサインを見ながらぼくは、どんなことを考えていますか。

④話合いにおける児童生徒の反応を予想し、話合いを深めるための補助発問等を考える。

- ・「描き残したい。」の発言から「描く」行動を、「学校の物に落書きをしてはいけない。」の発言から「描かない」行動を引き出し焦点化させ、一人一人がどちらの行為を選択したのか帽子の色で位置付ける。その後、それぞれの動機(理由)について考えさせる。

「描かない」

- ・自分のものではないから。
- ・落書きはいけないことだから。
- ・迷惑がかかるから。
- ・見つかったら怒られるから。
- ・見られたらはずかしいから。

「描く」

- ・みんなも描いているから。
- ・卒業の記念に残したいから。
- ・迷惑はかからないから。
- ・目立たないところなら平気だから。
- ・みんなに見てほしいから。

（③に対する児童の反応と補助発問）

- 「描く理由」を投げ返し、「描かない」側を揺さぶる。 ■「描かない理由」を投げかけ、「描く」側を揺さぶる。
- 双方の理由（動機）を明確にした上で、話合いを行う。教師と子どもが一对一にならないよう、「描く」を数人指名してから、「という考えだけど、描かない側はどう？」と、子ども同士の意見がからみあうように、教師が話合いを進めていく。
- 「確かにそうだけど、でも…」「そうかもしれないけれど」「〇〇さんの考えはわかるけど」等の話型を賞賛しながら、相手の発言を受けて自分の考えを発言させていく。
- 言い残したことがないか確認してから、「描く」側に、「描かない考え」がわかるか？投げかける。「わかるけれども、描いてしまう気持ち、人間の弱さ」を押さえる。
- 次に、「描かない側」に「描く気持ち」がわかるか？投げかける。「わかるけれども、乗り越えて、描かない考え」が強いことを押さえる。
- 主人公のぼくも、この両方の気持ちが渦巻いていることを押さえてから、第3発問につなげていく。
※多様な価値観に触れさせながら、十分に話し合い、一人一人の価値観を明確にさせていく。
※他の内容項目に流れないように、問い返しを行いながら、ねらいとする「4－（1）公德心」に焦点化させて話し合わせる。

⑤話合いの前提となる場面・条件を明らかにする。

- ・シャッターの落書きに興味 ・卒業生が残した落書き ・友達も机の裏に描いている
- ・自分だけのマークを描く ・お気に入りの作品完成

⑤' ③を投げかける前の発問等を検討する。

- 「家に帰ってすぐに自分のマーク作りを始めたのは、どんな気持ちからですか。」
- ・シャッターの落書きに興味を惹かれた主人公の気持ちに共感させる。（「だから、すぐに描きはじめたんだよね。」とまとめ、③へつなげる）

板書計画（略）

道徳学習指導案 7 板書計画 参照